

## 万葉の世界へ

中津市長 奥塚 正典

新元号「令和」の由来は万葉集。巻五梅花の歌 32 首の序に「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ（折しも、初春のよき正月で、天気はよく風は穏やかで）」とあります。

万葉集は中津も縁ありです。歌人久恒啓子さんの著書「万葉歌の世界」の「遣新羅使人の歌」の中に「分間の浦」として紹介されています。分間の浦は、中津市田尻の和間あたりで現在は中津港の一角、現地を訪ねると石碑が建ち由来が刻まれています。当時、遣唐使のほかには遣新羅使があり、船旅の途中遭難、ここ中津で船を修理し命がけの旅へ出発したようです。歌は 8 首、使人たちの使命感、妻への思い、切ない郷愁の念が詠まれています。今なお万葉集の世界の一端が中津にあるとは嬉しいことです。

さらに万葉と言うと、山国町が「万葉の里やまくに」と称し、様々な取り組みをしてきました。万葉集に詠まれたいろいろな植物が山国の豊かな自然の中に自生していることから、短文学活動を通じて自然を大切に作る里づくりと地域振興を図ってきたのです。全国から作品を募集し優秀作を石碑にして猿飛千壺峡から魔林峡に至る歌碑ロードに並べています。和歌、俳句、川柳、その数 72 首、建立費は作者持ち、一基「五七五七七」円です。地元三郷小学校歌も「万葉の香りゆかしい歌の里」と詠われます。何とも楽しく粋ですね。

情報瞬時に行き交い、諸事科学的に説明される現代は、万葉の時代とは生活様式や文明のあり様が大きく異なります。それゆえ、万葉の世界に入り込むと、自然や季節の移ろいへの感受性、また人と人の心の触れ合いやその純真な伝え方から、いつもとは違う世界と忘れていた自分を発見できそうです。

結びに、万葉集「分間の浦」から一首。

— 我妹子がいかに思へかぬばたまの

一夜も落ちず夢にし見ゆる —



万葉歌碑ロード